

アリストテレス

ジョン・バーネット

藤井義夫 譯

譯者小記

古代哲學の研究が古典語の精緻なる理解及び古代文化の全的把握の基礎の上におかれねばならぬことは、十九世紀の初葉に於ける新しき文獻學的理念の發生以來、すでに我々の常識となつてゐる。アリストテレス研究についても決して之が例外なすものではない。我々がたとへばアリストテレスに於ける哲學の概念の體系的把握を志すとき、この文獻學的基礎を閑却し全く異なる古代の思惟形象を近代的意味に改變するならば、それは、所詮惡しきデレンツァンチズムに墮さざるをえないであらう。この基礎工作の意味に於て以下のバーネットのアリストテレス論 (John Burnet: Aristotle, The Proceedings of the British Academy, Vol. XI, 1924) は充分注意されてよいのである。私自身は決してかれの解釋に全的な賛同を與へうと信ずるものではない。しがしこの異色あるプラトン學者がアリストテレスの發展について與へた大膽なる提言は、殊にイエーガーのアリストテレス解釋に對してなした抗議は、我々の反省を促すべき多くの契機を含んでゐる。アリストテレスの文獻學的研究が未

だ正當に評價されるに到つておないとこのこの國新學の現況にあつて、この小論を邦語に移植しておくことは、必ずしも無用のわざではないであらう。

實を云ふとアリストテレス位解釋に困難な哲學者はまづあるまい、蓋し彼があまり根本的でない論點をば凡ゆる側面から論議することを主張しながら、切實な問題として我々を打つものとなると神託的な文句で片附けてしまふからである。さりながらこのことは、尠くとも或る程度までは、彼の學說が我々に傳はつて來た不思議な經路に因るものと感ぜざるをえない。やがて分る様に、彼の獨立した哲學者としての全經歷は稀にみる程短いも

のであつた。今日アリストテレスの著作と呼ばれてゐるものは、大體に於て、彼が講義の臺本に使つた彼自身の私的な稿本である。それ故に、彼が最も確かだと感じたところの諸點が簡單に叙述されてゐるだけであるのに、あまり難解でないことが委曲をつくして論せられてゐることは驚くにあたらない。その上、なによりも大切なことは、我々の所謂アリストテレスの著作なるものが、彼の死後二百年以上も全く知られないでゐて、それから殆んど偶然によつて發見されたのだ、といふことに注目することである。他方、彼が生前に公刊しそして彼の死後もそれらによつてのみ彼が知られてゐたところの數多の著作は、殆んど全く失はれて了つてゐる。そのことがこゝ數年間私の携つてきた問題なのである、まことに、それは他の何かがなされうるよりも先に解かるべき問題だといふことは、久しい間明かなこととなつてゐた。それ

故に、今年になつてやつと手に入つたベルリンのヴェルナー・イエーガー (Werner Jaeger) 教授の新著の題目をなしてゐるものがそのことであつたの(一)をみても別に驚きはしなかつた。この著書の大なる功績は、アリストテレスの刊行された著作が凡て彼の初期時代に係はらしめらるべきであり、我々の有つてゐる未刊の講義は彼がアテナイに於けるリュケイオンの學頭であつた頃のものであるといふ取るに足らぬ考へを放擲してゐる、といふ點にある。イエーガーは、しかし、このアテナイ時代が短かつたことも、又それが突然終つてしまつたことも充分認めてゐない、と私はさう考へる。むしろアリストテレスが六十二の歳で比較的夙く流謫の裡に沒したとき、彼の著作は全く未完であつた様に私には思はれる。この點については後にもう一度歸らう。今のところ私は彼の生涯の最初の二つの時期について、私の知る限りのもの

に止めよう。しかしまづ刊行された著作と紀元前一世紀まで發見されなかつた講義の稿本との間に私が劃した區別に對する證據を注意して考察してみなくてはならぬ。

(一) Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung (Berlin, 1923).

一

最初に我々が現に有つてゐる著作の歴史を考察してみよう。ストラポンの傳へるところによると、

アリストテレスの後繼者、テオプラストスはこれらの著作をトロイアに於けるスケプシスのネレウスに遺し、そして後者は又それらを彼の後繼者たち——彼らは稿本の價値は充分辨へてゐたが哲學者ではなかつた——に譲つた。ところで、彼らは、アレキサンドリアの蒐集に拮抗するために書物を索めてゐたところのペルガモスの諸王からそれらの著作を護るために、穴倉の中にそれらをしまつ

ておいた。結局それらは莫大な額でテオスのアペリコンに賣却され、そして彼はそれらを極めて不完全な遺方で出版した。間もなく、紀元前八七年にストラがアテナイを占領しそしてアペリコンの藏書をローマに持つてきた、そこではテイラニオンがもつと正しい版を作らうと努力してゐた。最後に、それらの稿本はロードスのアンドロニコスの手に渡り、そして紀元前一世紀の末葉彼によつて刊行されたのである。^(一)

(一) Strabo, XIII, 608; Plutarch, Sulla 26, 1.

ところで、この極めて確かな陳述を疑ふ理由は少しもないのである。それはテオプラストスが問題の稿本を知らなかつた、といふことを聊も暗示してゐないと解されるであらう。が、實のところ、テオプラストス自身の講義がスケプシスのネレウスに對する彼の遺産の一部分をなしてゐたと謂はれてゐる以上、稿本が彼に知られてゐなかつ

たといふことが明瞭に含蓄されてゐるのである。その上、ストラボンはこの點を知悉するに非常によい機會をもつてゐた。彼がポントスの生れで、母方はその王たちに血が續いてゐた。彼は亦疑ひもなくローマで、ティラニオンの生徒であつた、だから彼が我々の所謂アリストテレスの著作の發見について知らなかつた筈はない。だからして我々はこれらの著作がテオプラストスの時代から紀元前一世紀まで全く知られなかつた、といふことを實際疑ふことはできないのである。(一)

(一) ツェラーは(英譯、第一卷、一四七頁以下)このことを反證しようとするが、實際にはテオプラストスとエウデモスがアリストテレスの講義を知つてゐた、といふことを示すに成功しただけである、それはストラボンの云つてゐることと完全に一致する。

このことは、勿論、アリストテレスの孰れの著作もこの期間知られなかつたことをではなく、ただ我々の原典をなしてゐる諸論文が決して刊行す

るために企てられたものではなく亦實際刊行されもしなかつたといふことを意味してゐるに過ぎない。キケロは或る場所で「アリストテレスの濶ぎ出せる辯舌の黄金なす流」と云つてゐる、これはたしかに我々のアリストテレスの自然的な記述だとは思へない、キケロの文學的嗜好が我々のそれよりも著しく華麗であつたことを我々が記憶してゐるならばなほさらである。むしろアリストテレスは多くの著作を刊行し、それらは疑ひもなく穴倉の運命から逃れた、そしてキケロが述べてゐるのはそれらについてある、といふのが眞實であらう。彼が我々のアリストテレスについてもいくらか知つてゐたことには疑ひがない、といふのは彼はティラニオンの後援者であつたからである、しかし彼がその多くを讀んだものとは信じ難い。彼がアリストテレスについて語つてゐるとき、彼は主にアリストテレスが生前に刊行した著作を意味

してゐる、そしてそれらは大抵消滅してしまつたのである。他方キケロの時代にスケプシスの穴倉から發見されたものが、それまでそれらのみ知られてゐたところの、そしてそれ故、存続することができなかつた刊行本よりも、結局、發展した貌に於けるアリストテレス哲學の眞の見解を傳へるものとみられた。不幸にしてそのことが我々にアリストテレスの哲學的發展の理解し易き説明を與へることをずつと困難にし、そしてそれが今日最も興味あることなのである。しかしアリストテレスの刊行本の可なりの部分が近年やつと眞正なものとせられる様になり、そしてこれが問題を稍容易にしたといふのは事實である。

(1) Acad. II. 38. 119.

この點に於てプラトンとアリストテレスとの對照は多くの意味で著しい。プラトンの最も著名な著作が彼の青年時代にそしてアカデメイアの設立

されるずつと以前に刊行された、といふことを我々は現に知つてゐる、そして彼の主たる目的がソクラテスの教説の記憶を保存するにあつたことを疑ふことも次第に不可能となつてきてゐる。彼がアカデメイアの設立後に刊行した對話篇はこの點に於て、そして、特にソクラテスに振當てられた場所に於て異つてゐる、彼はそこで次第に二次的な位置をとる様になり、遂に、ノ、モイに於て彼は全く姿を消してゐるのである。プラトンが講義を書いたことがあるとは信じ難い様に思はれる、といふのはアカデメイアはその創始者の記憶にずつと忠實であつて、我々はかつてプラトンが書いたことのある凡ての言葉をなほ保有してゐる、といふことを疑ふ理由がないからである。アリストテレスの場合には非常に異つてゐる。彼も亦大衆のために夥しい著作をもした、そして彼が數時代に互つて知られたのはこれらによつてのみであつた。彼

も亦二十年以上講義をした、そして紀元前一世紀に於て發見されたのはこれらの講義の稿本である。その結果は概して不幸であつた。たしかに我々はアリストテレスが講義を書くのを必要としたことを悦んでよい、といふのはもしさうでないならば我々はプラトンについてもさうである様にアリストテレスの最も得意とする信念を殆んど知らなかつただらうからである。最も初期の註釋家は、勿論、形而上學と呼ばれた諸論文の集成がアリストテレスによつたものであることを知つてゐた、がしかしこれと長い間知られてゐた刊行本との重大な相異を説明するに當惑しつくしてゐた。實のところ、久しい以前にはこれらの刊行本はプラトン哲學の演習に過ぎず、アリストテレス自身の信念に對する證據とみることはできない、といふ意見が行はれてゐた。他方スケプシスの穴倉から發見された未刊の稿本はアリストテレスが講義に使つ

た手稿であつて、彼の實際の敎説に對する唯一の根據であつた。尤もたとへ我々がアカデメイアに於てプラトンによつてなされた講義とアリストテレスの刊行本とのみを有つてゐたとしても、我々はなほプラトンは生れながらの著述家であり、アリストテレスはさうでないことをみる事ができただらうことは疑ひがない、たゞしかし我々はさらに數學的なプラトンとずつと通俗的なアリストテレスとを有つこととなつたであらう。現在のまゝでは、我々はプラトンが刊行してよいと考へただけのプラトン哲學を有つてゐるに反して、我々が今アリストテレスについて有つてゐるのは殆んど凡て彼の學校で與へられた講義なのである。彼の刊行された著作の多くは今日ではたゞ影の様な存在を保つてゐるのみであつて推定によつて再建される外はない。我々がつてゐる唯一の相當完全な資料は、凡そ一時代前に發見されたアテナイ

の國制である、それはたしかにアリストテレスの

晩年に屬し、そして事實紀元前三二九―八年と三二七―六年との間に書かれたものに違ひない。このことはアリストテレスが彼の生涯を通じて刊行を續けたこと、そしてスケプシスで發見された稿本は種々の年代のものでありそしてつひに改訂されなかつたことを示してゐる。それが、すでに云はれた様に、この題目に對するイーサーガー教授の主なる寄與なのである。私は一般になされてゐる様に、これら凡ての著作を、アリストテレスがアテナイに於けるリュケイオンの學頭であつたところの彼の生涯の最後の十三年間に配することを氏が拒否したのは正しいといふことを疑ふものではないが、氏の採用した年代學的排列を勿論こゝで仔細に論議するわけにはゆかない。氏によれば、それらは大部分プラトンの死後間もなく、アリストテレスがアテナイを去つてしまつた中間の時期

に屬してをり、そしてそれ故に彼の刊行本の大多數と同時代若しくはそれよりも夙いものである。

それ故に巧みに標示されたアリストテレスの生涯の三つの時期、即ちアカデメイアの學員の時期、小アジア及びマケドニアに行つて留守だつた時期、及アテナイに歸つてゐた時期、を辿つて行つて、そして尠くとも大まかな輪廓に於て、彼の著作のどれだけがそれらの各々に歸せらるべきかを見るのが一番よいであらう。このことはアリストテレスの生涯について、我々の知つてゐるところのものを考察する必要をおこさせる。

(一) Jaeger, *op. cit.* p. 350, n. 1 をみよ。氏は決定的であるらしうといふ理由でトル氏(Toulmin)の目附を採用してゐる。

二

まづ第一にアリストテレスはアテナイ人でなくイオニア人であつた。ギリシア哲學について、それがまるでアテナイ人のもでなかつたといふこ

とは、全く、最も顯著なる事實の一つである。それはイオニアに於けるミレトスに始つた、しかしビタゴラスの時代から、南部イタリー及びシシリイのイオニア及びアカイアの諸市が獨立した中心となつた。それが東方からアナクサゴラスによつて、西方からバルメニデス及びゼノンによつてアテナイに齎され、そしてソクラテス——彼の仕事を我々はプラトンの手を通じて知るのみなのであるが——によつて新なる出發が與へられたのはペリクレスの時代以後のことであつた。ソクラテスとプラトンとのこの二人は疑ひもなくギリシヤ哲學の歴史に於ける最大の名である、しかし我々は彼らの名前だけが第一流に位するアテナイ人のそれであるといふことを忘れてはならぬ。プラトンがアカデメイアを設立した頃にはアテナイの盛時は終つてゐた、そして彼は彼の政治的見解の實現を外國に索めねばならなかつた。一時代以上も

後に、アリストテレスがリュケイオンに學校を設立したとき、彼はマケドニアの後援の下にそれをやつた、そしてそれはアテナイがイオニア人にとつて自然の集合所であつたからといふ理由以外のものではなかつた。我々の知る限りでは、アカデメイアに於けるアテナイ生れの人は小數であつた、そしてリュケイオンではなほ更尠なかつた。にも拘らず、哲學を學ぶためにギリシヤの社會の隅々からやつて來たのはアテナイ人であつた、尤も彼らはアテナイの政治を知ること尠くかつ意に介することも稀ではあつたが。デモステネスと同時に代の人であつたアリストテレスは彼の修辭學に於て二三度彼を指名してゐるに過ぎない。アリストテレスの生涯の最後の時期に屬してゐる著作、即ち彼のアテナイの國制に關する論文が發見された今日、まことに、我々は彼がアテナイの政治を眞に理解すること如何に貧しかつたかを自分でみる

ことができる。

アリストテレスは紀元前三八四—三年カルキデイク半島の東部、スタゲイロス（或はスタゲイラとも呼ばれる様になつた）に生れた。彼の父ニコマコスニコマコスは醫家であり、しかもマケドニア王の侍醫であつた。晩年になつてできたアリストテレスの息子も、ギリシヤの習慣に従つて祖父を襲名した、しかしこれが事實家族について我々の知つてゐる凡てである。彼の父はアリストテレスが極く若い頃死んだものに違ひない、といふのはこれに次いで我々が彼について聞知してゐることは、彼の後見人プロクセノスが三六七—六年、即ちアリストテレスが十七歳のとき、彼をアテナイに遊學させたといふことだからである。彼がそこに行つたのはたしかに醫學を研究するためではなくて、たゞそこが知的な野心あるイオニアの青年が行くに相應しい場所であつたからに過ぎない。當時プラト

ンのアカデメイアは實にギリシヤに於ける高等教育の唯一の中心であつた。天文學者、エウドクソスが同時にアテナイに赴きそして彼の生徒を伴つたらしいといふことを注意することは大切である。ずつと後に書かれたニコマコスニコマコス倫理學から我々はアリストテレスがなほエウドクソスを畏敬の念を以て仰いでゐたことを知ることができる。さらにもつと大切なことは、アリストテレスが最初アカデメイアに加入したとき、プラトンは明かにそこにはゐなかつたといふことである。シラクサの僭王ディオニシオス一世が没し、そしてプラトンがディオンの緊急の勧誘によつて、ディオニシオス二世の教育を指導するためにシラクサへ行つたのは丁度この頃（紀元前三六八—七年）であつた。シリールへの再度の訪問は三六一年に行はれた、そして翌年まではアテナイに歸らなかつた。そのときですらシラクサでの用が濟んではゐなかつた。紀

元前三五七年ディオンは流謫からシシリアに歸り自らシラクサの主となつた。プラトン(彼は七十歳であつた)は彼に隨伴しないで、アカデメイアの數人の學員、特に彼の甥スベウシッポス及びキプロスのエウデモスが從つた、そして紛争の時期が始まつたのである。アカデメイアの學員であつたカリッポスがディオンを殺害した、そしてプラトンはディオンの友だち及び黨員に、自分を辯護しそして彼らに忠告を與へた二通の長い手紙——それはなほ現存してゐる——を書いた。(一)これら凡てのことからして、アリストテレスが學員となつた最初の十年間はアカデメイアの學頭が彼に及ぼした個人的影響は僅かなそして間接的なものであつたに違ひないこと、そしてプラトンがアテナイに歸つてきたときですら、彼は主に、*ノ、モイ*——彼の死後まで刊行されなかつた著作——を執筆することと大部分數學に關する講義をなすことに逐はれて

ゐたことを我々は見ることが出来る。アリストテレスがこの方向に於て如何にして彼に追隨してゆくことができたかをみることは易しいことではない。彼が嚴密な數學的見方を會得しえたといふ證據はない。就中、アリストテレスが二十年間その學校に屬してゐたプラトンは、最早、*ポリ、テイ、ア*を書いたプラトンではなかつた、といふことを我々は現に知つてゐる。この大著は多分彼がアカデメイアを設立する前に、そしてたしかにアリストテレスがそれに加入する可成前年に終つたものであらう。*バル、メ、ニ、デ、ス*及び*テ、ア、イ、テ、ス*すらも、外見からすれば、アリストテレスがアテナイに來る前に書かれたものらしい、そしてこの頃のプラトンの文學的著作には溝渠があるのである。

(一) *Epp. VI 及び VII.*

にも拘らず、プラトンのアリストテレスに及ぼした影響は全く非常なものであつたことには疑ひ

を容れる餘地がない、そのことは彼がプラトンの死まで、言ひ換へると二十年の期間をアカデメイアの學員のまゝでゐたといふ事實から直ぐでてくる。特に彼がプラトンの初期の凡ての作品を、そしてとりわけ、彼に深い感銘を與へたところの**バイン**、**ド**ンを讀んだことは疑ひない。彼にとつては、謂ふまでもなく、ソクラテスはたゞ名前に過ぎなかつた。彼の時代に於て、アカデメイアの學員が

彼がやつた以外の仕方、即ちプラトンの青年時代の諸著に於ける主なる貌以外に、彼を記憶し或は彼を知つてゐたとは考へられない。アリストテレスがアカデメイアに加入したとき、ソクラテスが死刑に處せられてから一時代以上も經つてゐた、そして残つてゐるアカデメイアの學員は極めて尠なかつた。何も書かない教師の記憶は直ぐ忘れられる。確かなことは、アリストテレスがプラトンの初期の作品の中になにか新しいを以て、彼

の立場から、最も重要なものを見出したことである。アカデメイアの學員となつた最初の頃、アリストテレスはプラトン學徒であるよりもソクラテス學徒であつた、或は尠くとも彼はたしかにプラトンのソクラテスの對話篇の中に見出さるべき、しかし彼の晩年の敎説に於ては恐らく最上の重要性をもつてゐなかつたところの見解を持してゐた、と云ふも恐らく過言ではあるまい。

この觀點からして、彼の初期の著作の一つが主として**バイン**、**ド**ンに基礎をおいたところの**エウデモ**スと題する對話篇であつたことは極めて重要なことである。この對話篇の主題はその年代についてあまり疑を殘してゐない。キプロスのエウデモス（アリストテレスの弟子ロードスのエウデモスは注意して區別されねばならぬ）は紀元前三五四年、即ちアリストテレスが三十歳前後で、既に三三年位アカデメイアの學員であつた頃、シラクサの

前方で死んだ。その對話篇の主題はエウデモスの死が、五年以内に故郷に無事に歸れることを約束したところの夢の眞の成就となつたといふことである、即ち約束が彼の死によつて果されたのである。靈魂不滅のその論は明かに、*バイドン*に、そして特に、魂は肉體の調和 (*harmonia*) ではないといふ説に基礎を置いてゐる。(ローゼ編、斷片四五) 我々は亦プラトン初期の著作の影響をシレノスの神話の中に見ることができ、それは明かに、*ポリテイア*第十卷に於けるラケシスの演説をモデルとして構成されてゐる。三十の歳でアリストテレスはなほプラトン學徒、加之、初期的形態のプラトン學徒であつた、と我々は確實に推定してもよいであらう。

全く同じ時代に歸せしめらるべき他のもつと重要な著作は、*プロトレプテイコス*である、それはキプロスの或るテミソンに宛てた哲學的生活への箴

言である。後の世に聖アウグスチヌスに非常な影響を及ぼしたキケロの、*ホルテンシウス*から學びるところのものを通して我々はこの書のことを多少知つてゐる。我々がアリストテレスの「公開的」論文に關する、*バイウオーター* (*Bywater*) の著作の最初の場合をもつのは、こゝである、といふのは氏はヤングリコスの同名の著作から、*プロトレプテイコス*の大部分を取戻すことができたからである。(一) それはすばらしい編纂である。その大部分はプラトン拔萃から成つてゐる。しかしこれは中頃にアリストテレスからの一聯の拔萃によつて遮られてゐる。*バイウオーター*はそれを、*プロトレプテイコス*から來たものと同一のものだと論じた最初の人である。

(一) J. Phil. II (1869), 55 sqq.

その著作の最も際立つた特長は、それが最も力強い仕方では、觀想的生活を、それをなし得るものに

とつて最高の力として勧めたことである、そして

我々はこれがアリストテレスの生涯を通じて彼の

信念であつたことをみるであらう。彼は生都もな

く重要なものは何ものをも有たなかつた、そして

イオニア人がさうした見解をとるとは自然のこと

であつた。プラトンの態度は違つてゐた。彼はアテ

ナイの政治にはあまり關係をもたなかつた、がし

かし彼は目前の大なる苦惱はギリシヤ文明のため

に西方を保持することにあつたといふことをみる

程の先見の明があつた。アリストテレスはその様

な考へにあまり同情を有たなかつた、そしてプロ

トブレ、テイコス、は彼がその様な考へによつて影響

されることの如何に尠かつたかを示してゐるもの

として主に興味があるのである。この著作に於て

彼は *spouters* が人間の指導者たるべき要求を掲げ

てゐる、しかもそれはなほ言葉のプラトンの意味

に於ける *spouters* であつて、彼がずつと後に彼自

身で與へざるを得なかつた意味に於ては、はない。

三

紀元前三四八―七年凡そ八十歳でプラトンは死

んだ、そして彼の甥スベウシッポスがアカデメイ

アの學頭として彼を紹介いだ。今やアリストテレス

をアテナイに留むべき何物もなかつた。彼はクセ

ノクラテスと緒に小アジアに赴き、そして彼の生

涯の第二の時期が始まつたのである。我々はプラ

トンの人格のみが避け得たところの西方と東方と

の間隙を再びみるのである。アカデメイアの繼承

についての逸話を繙説する要はない。スベウシッ

ポスはアテナイ市民であり、クセノクラテスとア

リストテレスとはさうでなかつた、そして當時ア

カデメイアの學頭は財産所有權を法律上享有する

アテナイ人であるべきことが必要であつたのであ

らう。後に至つて、この困難を免れる何らかの手

段が、疑ひもなくマケドニアの勢力の下に於て、見

出されたに違ひない、なせならクセノクラテスが三三九年アカデメイアの學頭としてアテナイに歸り、亦アリストテレスは三三五年そこでリュケイオンを設立したのを我々は見出すからである。今のところ興味ある點はプラトンの學校の二人の指導者が相緒にアテナイを去つて小アジアに赴いたことである、そこにはコリスコス及びエラストスの下にアカデメイアの殖民地と呼ばれてもよいものがあつた、それらの人はアソスに居を定めそしてアタルネウスの僭王、ヘルミアス——彼らは彼をプラトン學派に改宗せしめたのであるが——の後援を享けてゐたのである、これはたしかに意味あることである、といふのはこれらの土地にアカデメイアのアジア支部を設立する可能性が本當にあつたことを示してゐるからである。プラトンの第六書簡の眞正であることが一般に承認せられてゐる今日、我々はクセノクラテス及びアリストテ

レスの交友の範圍を以前よりもよりよく知つてゐる。その學校はアカデメイアの學員であつたコリスコスとエラストスとによつて設立された、そしてその書簡は、プラトンが個人的に面識のなかつたヘルミアスと緒に彼らに宛てられてゐる。アリストテレスはアソスに三年間滞在した、しかしヘルミアスがベルシヤ人によつて死刑を執行されたので、彼はレスボスのミタイレネに移り、そこでヘルミアスの娘ピチアと結婚した。

これは一二の興味ある點を喚起する。形而上學の第一卷に於てアリストテレスはプラトンの形相論を極めて奇妙な仕方では批評する様に餘儀なくせられてゐる。彼はそれを批評してゐるときにすら、「我々」が支持する教説として到る所でそれを述べてゐる、そしてそれは彼がなほ自分をアカデメイアの學員とみなしてゐることを意味するに外ならない。もしさうだとすると、その書物は彼の

アソス滞在時代のものに違ひない。同じことはアリストテレスの二三の著作でコリスコスに屢々言及してゐることからも起つてくる様に思はれる。それらのことは彼が講義に出席してゐたことを意味してゐる様である、そしてそれは、言ふまでもなく、それらの年代を決定するに極めて重要なことなのである。

アリストテレスが紀元前三四二年アレキサンドロスの教育を監督するために招聘されたことは、彼が、たしかマケドニアの代辯者であつたヘルミアスと昵懇であり、亦マケドニア王と彼の父とが職業上關係があつたことによるものであらう。アレキサンドロスについてアリストテレスの著作からは殆んど何も知られない。彼は自分の書いたものの中で彼について語つてゐることは極めて稀であつて、我々は彼らが實際どの位一緒に居たのか知らない、がしかし尠くともアリストテレスが彼

の卓絶した生徒を理解しなかつたことは明かである。三三五年までに彼はアテナイに歸り、そこでマケドニアの統治者アンティパトロスの保護の下に學校を開いた。

ところでこのことはアリストテレスが凡そ十二年間、即ち十七から四十九の歳まで、アテナイから去つてゐたことを意味してゐる、そしてこれが彼の生涯の中で最も重要な時期であつたと考へても恐らく間違ひではあるまい。最初彼は疑ひもなくプラトンの著作を續けようと考へてゐただけであつた、がすぐ變化が起つたことは明かである。二十年間彼は師の蔭に蔽はれてゐた。今や彼の天賦の才——もし彼が有つてゐたとするならば——が顯現すべき絶好の機會であつた。ギリシヤ人は決して慌てなかつた。プラトンがアカデメイアを設立したとき四十であつた筈である、そして彼が我々に最も親しいものとなつた所以の著作は

凡てそれ以前に書かれた、そしてその主たる目的はソクラテスを知らしめることであつた。アリストテレスも亦最初師に全く心を奪はれてゐた、そして彼が進むべき方向に彼を出發せしめたのもプラトンであつたことは疑ふ餘地がない様に思はれる。プラトンが、彼の生涯の終りに至つて、彼の弟子の注意を動植物の研究にむけ様と決心してゐたことも確かである様に思はれる。このことはその方面に生れつき趣味をもつてゐたアリストテレスだけでなく、プラトンの甥スペウシッポスも亦生物學に注意をむけた、といふ事實から起つてくる様に思はれる。スペウシッポスは *"Opus"* と題する書物を著し、その中で動物の分類を見出さうと試みてゐるが、この方面に於ける彼の業績は大したものではなかつたのであらう。喜劇詩人たちは亦、彼ら一流の仕方、動植物の分類を樹立しようとするアカデメイアの努力を嘲笑した。し

かしアリストテレスにとつてこの新しい探究の分野は殆んど啓示として顯はれた様にみえる。私の同僚トンプソン (D'Arcy Thompson) 教授はアリストテレスによつて誌された種属の多くは小アジア、殊にレスボスに屬するものだといふことを指摘した、そしてもしさうだとすると、それで事は解決するわけである。この點でイエーガー教授は間違つてゐる様である、そしてコリスコスは論理的學的論文にのみならず、亦生物學の講義の或るものにも現はれてゐることが注意されてもよいであらう。

(1) On Aristotle as a Biologist (Harbert Spencer Lecture, Clarendon Press, 1913).

事實、もしこのことが正しいならば、それはアリストテレスの全發展への手懸りだ、と私は考へる。彼はプラトンの様に數學者ではなくて、プラトンが彼の注意を生物學にむけたとき自己を見出

した。プラトンはイデア論 (Idea, eidein) について、彼がアカデメイアを設立した後に書いたどの著作の中にも、何も述べなかつた、尤もピタゴラス學徒だと自稱する人によつて一度語られてゐる、テイマイオスを除いてゝある、しかしアリストテレスは勿論ソクラテスによつて説明されてゐるところのバイドン及びポリテイアからそれについて凡てを知つてゐた。勿論彼は亦プラトンによつて彼の晩年に於て説明されたその教説の數學的形態をも、彼に可能であつた限り、知つてゐた。アリストテレスにとつて、彼が一度生物學に興味をもつに至るや、プラトンが提示したところの理論の數學的形態は少しも意味をもたなくなつた、そしてこゝに再び我々はアリストテレスのイオニア人的性質が自らを主張してゐるのを見出すのである。我々がプラトンのイデア論とのあからさまなる破綻を最初に見出すのは哲學についてと題された

アリストテレス

對話篇に於てゝある、そして次の數代のストア學派とエピクロス學派とが、それについての彼らの知識をえたのは、この源泉からのみであつた。事實、それはアリストテレスが教ふるに足る彼自身の哲學を有つてゐたといふことの公示であつた。その見地からして、それは勿論重大な喪失であつて、我々はそれが漸次回復されつゝあることを悦ぶべきであらう。⁽¹⁾ 批評されたプラトンの説がバイドンやポリテイアに於て我々に親しいものとなつてゐるそれではなくて所謂「イデア數」(εἰδῶν-*tydei arithmoi*)であることは有意味である、その説を我々は、それについてアリストテレスが我々に語つてゐるところから、できるだけ再構成しなければならぬ、なせならそれはプラトンの刊行された著作の中には見出されないからである。この對話篇の中で、アリストテレスは自身で語り、そして我々はその斷片を有つてゐる、(ローゼ編、斷片

八)その中で彼は「たとへ彼の反對が論争好きの精神に由るものと思はれるにしても」その説に同感はできないと云つてゐる。それは斷乎たる宣言である。この對話篇が形而上學の第一卷より後のものであることは明かである、こゝでもプラトンの形相論が批判されてゐるが、しかし到る所で「我々」が支持する説として語られてゐる。唯一の相異は哲學についてなる對話篇が公的宣言であるに反して、形而上學の批評は學校のためにのみ企てられそしてずつと後になつてやつと光をみたものである。プラトン主義とのこの破綻はアリストテレスの生物學的研究に關聯してゐると考へるのが最も自然的だと思はれる、尤もこれがイェーガーの見誤つた點だと私は考へるのだが。しかもプラトンとアリストテレスとの離間の起源を我々が尋ねばならぬのはたしかにこゝである。今日に於てすら、數學者がプラトン主義を洞察することは

比較的困難が尠いが、生物學者は彼ら自身の研究の對象に對し稍々不都合だと感ぜられるところのものによつて當惑され勝た、といふことを我々は見ることが出来る。それは前世紀までは全く自然的なことであり、そして紀元前四世紀に於ても完全に理解しうることであつた、が私は今日そのことがそれ程自然的であるかどうか、といふ疑問を提出してみたいと思ふ。私は生物學者でも數學者でもない、しかし私は二十世紀に於て彼らの相反する見地が一致する傾向がありはしないかどうかを疑はざるをえない。紀元前四世紀に於てはこのことは疑もなく不可能であつた、しかし私はもしアリストテレスが近代の進化論を知つてゐたとしたならば、彼がやつた様にそれ程はつきりプラトン説を卻けねばならぬと感じたかどうか、を問はざるをえない。それはともあれ、アリストテレスの情熱的な興味が主に、彼をしてイデア論を全く

抛棄せしむるに到つたと。この生物學の中にあつたことには疑ひがない、たとへば未刊の講義に於てさへ、彼がプラトンから意見を異にせざるをえないと感じたときにも、彼はつねにプラトンを畏敬の念を以て語つてゐるけれども。後日、彼の著作を苦心して註釋したのはプラトンのアカデメイアであつた、そして我々がそれらの保存と解釋とを最も多く負つてゐるのはその學員らにである。新プラトン學派が二人の間の根本的な差異をあまりに無視したといふことは成程あり得べきことである、しかし彼らがプラトンよりもアリステレスの解釋により多く身を獻げたことも事實である。彼らはアリステレスがプラトンの後期のそしてより個人的な教説を知る唯一の源泉だといふ事實を尠くとも漠然と意識してゐたのである。

(一) J. Phil. VII. 64 に於けるパイウォーターの所論とイエー

ガーによつて一二五頁以下に與へられたこの對話篇の説明と

アリステレス

を比較すれば、このことがどれ位進んだか分かるであらう。

しかしアリステレスがイオニアの彼の先驅者たちに歸つたことは彼の一般的世界觀に全く不幸な影響をもつたことは疑ふ餘地がない、そしてこのことは不幸な結果となつたのである。自然學、天體論、及び生成消滅論とは決して彼の生物學的著作程にはアカデメイアへの進歩を表はしてゐない。それらに於ては凡ゆるものは宇宙の中心に静止してゐる地球に依據し、星辰は二十四時間の中に一回それを回轉してゐる。アカデメイアがこれより遙かに進んでゐたこと、そしてその影響の下に太陽中心説すら發展してゐたことも疑がない。ルネッサンスの偉大なる人々をしてアリステレスを承認し難からしめたのは、そして爾來彼を適當に評價することを妨げたのはまさしくこのことであつた。これらの事物に於けるアリステレスは最善のアリステレスではない、彼の眞の偉大

さは生物學者としてゝあつた。

しかしこれらの點を茲で詳細に論じることにはゆき過ぎることになるだらう、尤も私は屢々アリストテレスの主著とみられてゐるもの、即ち形而上學についてもつと言はねばならぬと感じてゐる。

この著作の題目は後代のものである、そしてアリストテレス自身は「メタプシカ」といふ言葉を決して用ひてゐない。我々がみた様に、その第一卷はたしかに彼がアソスに於ける彼の學校で講義をしてゐた時に作成せられ、そして第二卷及び第三卷も同じ時代のもの、即ち彼がその主要なる學說、形相論を放棄してしまひながら、なほ自分がアカデメイアの學員であることを感じてゐた頃のものであることを意味してゐる。しかるにこの點から凡ての連絡が外見上無くなり、そして第四卷と緒に我々は哲學的語彙の議論に入るのである、それは獨立した著作である様にみえる、しかるに最後

の二卷はアカデメイアで行はれたイデア數論の一つ、或はむしろ二つの議論を含み、その著作の殘餘の部分と關聯を保つてゐるとはみえない。第五—七卷はこれらよりもずつと後の時期のものであると思はれる、といふのはそれらは一層重要な題目を取扱ひそしてアリストテレスが晩年に支持した見解を顯示してゐる様に見えるからである。第十卷は全く獨立した論文である、それは彼が第一哲學と呼んでゐるものに關するアリストテレスの見解を説明してゐる様に見える。たしかにこゝで問題の溝渠が發見される、しかし不幸にしてそれは溝渠として殘つてゐる。形而上學がその著者によつて單行本とみなされる様に、いや勿論、改訂される様に、意圖されたものかどうか、或は彼が書いたものの中それが編纂者たちにとつて他の適當な場所を見出すとは考へられなかつた様な部分から單に成立つてゐるものかどうか、を我々は少

しも知らない。我々がたゞ云ひうるのはそれが有つてゐる題目は後の術語「メタフシカ」を生せしめ、そしてそれらの取扱つてゐる事柄の重要さを示してゐるものである。しかし現在のまゝでは、たしかにそれは終始一貫した全體ではない、これは非常に異つた時代の斷片から成立つてをり、そしてそれはなにもものにもまして、アリストテレスの哲學が決して完成されなかつたことを示してゐる。これ以上こゝで述べるのはその場所でないであらう。

私は、しかし、論を閉ぢるまへに倫理學について若干述べておかねばならぬ様に思ふ。アリストテレス集に於てこの題目をもつた三つの著作、ニコマコス倫理學、エウデモス倫理學、及び大道徳論があることは誰でも知つてゐる。これらの中最後のものは今のところ論外に置いてよいが、最初の二つは非常に切實な問題を提示してゐる。十九

世紀に於ける大抵の原典出版者は（私をもこめて）ニコマコス倫理學はアリストテレスのものであり、エウデモス倫理學はエウデモスに歸せられる、といふ意見に従つてゐた、ところが最近これが問題となつて、私の見る所では、イエーガーによつて終に反證が擧げられるに至つた。彼によるとアリストテレスの道徳哲學にははつきり特長をもつた三つの段階があつて、それは、（一）刊行されたとしてプラトンの晩期を表はすプロトレプティコス、（二）中間的段階に屬するエウデモス倫理學、及び（三）アリストテレスの最後の著作の**一**であるニコマコス倫理學によつて代表させられる。これは、と彼は主張してゐる、エウデモス倫理學とプロトレプティコスとの合致から、特にその著作が今ではヤンブリコスから補充しうるところから明かである。このことを離れてみて *νεφελεστερον* *Νομοσ* への引證（卷 B、第一章、一一一八 b 三四）は

その書が眞にアリストテレスのものであることを證明する。それが小アジア滞在中に書かれたことはその中にニコスコスが出てくることから起つてくる様にみえる。(一二二〇a一九及び一二四〇b 二九)

エウデモス倫理學がプロトレプティコスとニコマコス倫理學との間に介在することは多くのことから、就中、理論的、實踐的、及び享受的なる「三つの生活」が全くプラトン風に知(*epistēmōn*)、善(*agathōn*)、及び快(*hēdonōn*)から引出されることが示されてゐる、その仕方から出てくる、とイェーガーは考へてゐる。このことがニコマコス倫理學に出てゐないことは明かである、そこでは *epistēmōn* と同義語としての *epiphrōnōn* の古きプラトンの用法が放棄されそして思辨的 *epistēmōn* と實踐的 *epiphrōnōn* との區別によつて置き換へられてゐる。しかしニコマコス倫理學は *epistēmōn* 或は徹知的知識を他のものよ

りもずつと高く評價してゐることが注目されるべきである。事實、イェーガーがやつてゐる様に(二五〇頁)理論的生活がニコマコス倫理學の終りに到つて、倫理學的善をそれに依據せしむることなしに、たゞ持ち込まれてゐるだけだ、といふのは事を正當に説明したものではない、それは正しいには違ひないが、しかし全體が正しいといふことから極めて遠いのである。議論の主たる目的を終りまで持ち越すことはアリストテレスがプラトンから學んだ哲學的方法と全く一致してゐる。しかも觀想的生活がニコマコス倫理學で議論されるべき、それはその著作の他の如何なる部分とも比較にならぬ程の熱情さと熾烈さとを以てなされてゐるのである。それが亦第六卷に於て *epiphrōnōn* 或は實踐的知識に二次的重要さをしか與へなかつた所以である、と私は考へる。論文全體が思辨的知識或は *epistēmōn* の特異な優越さの主張に導く様に意圖

されてゐるのである。

事實、もしニコマコス倫理學の最後の數頁が眞實であるならば、——誰もそれらが眞實でないことを提案したものはない——我々は人間の究局の善が魂の理論的或は觀想的「部分」の行使に外ならないことを我々は見出すのである。第六卷に於て *epithymois* 或は實踐的知識を貶斥したのは *logia* 或は理論的知識及びその活動 *theoria* の位置を前よりも一層高めようと意圖してゐる様に見える。だからもしニコマコス倫理學が、イェーガーの主張してゐる様に、アリストテレスの生涯の晩年に屬してゐるとするならば、彼が死ぬるとき、アリストテレスは凡ゆるものが理論的或は觀想的生活に隸屬すべきであるといふ體系を教へようとしてゐた、と我々は結論することを餘儀なくされるであらう。同様の考へがデ・アニマの第三卷に於けるヌースの説明を解釋するためにも用ひられてよ

いといふことを我々は提案しておかう。それは果しれぬ論争に導いた、がしかしこれと前二卷との外見上の喰ひ違ひは同じ原因によるものと、私はさう考へる。デ・アニマの最初の二卷に於て我々に印象せしめるところの精神的能力の外見上の貶斥は倫理學第六卷に於ける *epithymois* の外見上の貶斥と似てゐる、そして精神 (*noûs*) の高揚に對する道を準備することを意味してゐる、あたかも他の場所 に於て實踐的知識 (*epithymois*) に配せられた低い位置が理論的知識 (*logia*) の高揚のための道を準備すべく意圖されてゐる様に。主要の點を終りまで或はその近くまで持ち越すことは明かにギリシヤの哲學的著述の特性である。そして我々がその様な著作の前の部分の或る考へを無視して議論するならば、我々は稍もすると誤謬に陥る。他方、もし我々が終りまで讀んで行つて、然る後に顧つてみるならば、最初見たとき理解に困難だと見え

たところのものが新しい光の中に現はれるのを我々は屢々見出すであらう。

たゞ我々はいつの場合でも、アリストテレスのこれらの著作を理解しようと試みるとき、我々は刊行された著作をではなく講義を取扱つてゐるのだといふことを記憶せねばならぬ。もし我々がそのことを記憶してゐるならば、イエーガーが當時の通常のギリシヤ人にとつてこれらの著作の方法は縁なきものであり快からざるものであつた、(三六〇頁)と云つてゐるのが正しいといふことは、まるでいはれなきことである。通常のアテナイ人は疑ひもなくそれらの著作をその様に考へたかも知れぬが、我々はアリストテレスがアテナイ人ではなく、そして彼の聴衆は一層さうでなかつたことをつねに記憶せねばならぬ。我々は彼が傳統的なイオニアの學風と世界に對するイオニア人の傳統的態度とを持してゐることを感得するためには、

ヒポクラテスの論文 *Περὶ τῆς ἀφροδισιατικῆς πόσεως τῶν ἀνδρῶν* といつた様な一世紀前のイオニアの學術的文獻を一瞥すれば足りるのである。私はアリストテレスのそれらのものに對する態度には根本的に新なるものがあるとイエーガーの云つてゐるのが正しいとは感じられない。むしろアリストテレスは如何なるアテナイ人も曾て夢たことのないイオニア人の世界―地平をも有つてゐたと彼が云つたとき(三四頁)一層正しくある様に思はれる、尤もアテナイ人でありながらしかもアリストテレスより一層廣い共感を、アリストテレスが自身で感じる能力のないことを示したところの實踐的事物への興味に結びつけたプラトンをはつきり除外しなければならぬのであるが、こゝでも亦アリストテレスは、汎ギリシヤ的共感をもつたアテナイ人の影響の下に二十年間も住んでゐながら、なほ典型的なイオニア人である。

四

このことの明白に現はれてゐること彼の生涯の最後に如くものはない。彼はアレキサンドロス大王の師傳であつた、が彼はその人について殆んど述べてゐない。彼は彼の生涯の最後の十三年間アテナイに於ける彼の地位がアンティパトロスに負つてゐたといふ事實を意識してゐなかつた様に見える。そしてしかもアンティパトロスがアテナイを立去りそしてアレキサンドロスが没したとき、(三三三年)彼は直ちにアテナイを去らねばならなかつた、そしてエウポイアのカルキスに赴き、そこで彼も又やがて六十二の年に死んだのである。プラトンは一八十までアカデメイアの學頭であり、ソクラテスが元氣盛りで死刑に處せられたとき丁度七十を過ぎたところであつたことは注目する價値がある。當時のギリシヤ人は非常に長生きをした、そしてアリストテレスの比較的夭折したこと

は、彼がたしかに企てたであらうところの、そして前にも示された通り、その證據が今でも發見されるどころの彼の體系の最後の修正を我々から奪つたことは疑がない。我々が有つてゐるところの最も優れたものの多くは、彼がアテナイにゐなかつたときのものである、そして彼の生涯の最後の十三年は彼が少しも關與せずかつ——驚くべきことの様に見えるかも知れぬが——彼が興味をさへもたなかつた政治的事件によつて終りとなつたところの未完成の時期を示してゐる。最も欠けてゐるのはこれらの最後の年に於ける彼の思想の研究である、と私はさう考へる、それに對しては、私が見せようと試みた様に、イエーガー教授の無視した若干の事實がある。氏によればアリストテレスはアレキサンドリアの學藝を豫想しながら彼の晩年を送つた様に見える、そして或る點でこのことは正しい。しかし私はそれは全部の眞理ではな

い、或はその最も重要な部分ではないことを確信した様に思ふ。反對に、彼の著作の年代學的順序に關してこれまでに發見されたよりもより以上のことをなほ確めることが可能である、と私は信じてゐる。プラトンの場合にはそれは首尾よく爲し

遂げられた、そしてアリストテレスの場合にはそれは一層困難であるかも知れぬが、私はこれ又爲し得られるであらうことを疑はない。だから我々はアリストテレス哲學の最後の段階はイエーガー教授がすでに我々に與へられた價值ある著書に於てある様に見えるものよりも異つたものであつたことを見なければならぬ、と私は信じる。言ふまでもなく氏はアリストテレスの發展に従つてゆかうと試みた最初の著者である、しかしもし彼の最後の著作が何であつたかを決定することができさへすれば、なほなさるべきことが残つてゐる、と私は考へる。ニコマコス倫理學の最後の諸頁を書

いた人が、彼の著作がその機熟せずして中絶したときなにかもつと言ふべきことを有つてゐたことは、尠くとも確かである。(完)